

工化 東海大学工化同窓会 会報

揮毫 松前 達郎 総長

2016 年第 1 号

会長挨拶

同窓会長 吉田 滋人 (昭和五十年卒)

学科の歴史は60年になる。人間に例えると「還暦」を迎え、最初の卒業生が80歳を超え、同窓生は親から子そして孫までの3世代の歴史を持つ組織になった。応用理学科工業化学専攻から工業化学科を経て、現在の応用化学科と至り、卒業生は7,500名になる。この卒業生が社会で活躍をされていることは、輝かしい歴史であると感じる。

その同窓生の連携を少しでも深めるために今年創立30年を迎える同窓会があり、同窓会誌「工化」があるのだと思う。同窓会誌は、28年前の平成元年3月に第1号が発行され、第4号まで発行されたが、平成7年以来実に21年ぶりに復活した。同窓会員の情報交換の場になってくれれば幸いである。

さて、同窓会として連絡が取れない方が約3分の1であることも事実。現行連絡が3年間取れなくなると、住所録からデータが消去されると聞く。このような場合には、次の東海大学同窓会事務局へご連絡願うようお願いしたい。

検索: 東海大学同窓会個人情報変更届 または、<http://www.kouyu.tokai.ac.jp/dousoukai/active/index.html>



主任挨拶

応用化学科 主任 秋山 泰伸

工化同窓会会員の皆様、2015年度より応用化学科の主任を担当しております秋山です。右も左も分からない状態で東海大学に着任して本年度で早13年目になりましたが、同窓会および学科内外の教職員の皆様のお力添えのおかげで、主任という重責を何とか勤めさせていただいております。

化学はものづくりの基礎で、いかなる分野でも“化学”の知識なしに問題を解決できないと思っております。学科の教員や学生の研究テーマをみましても、医療系や環境系、また電子材料や水素エネルギー、さらに、医学部等との学部をまたぐ共同研究も盛んに行われております。

現在、大学の置かれた環境には厳しいものがあり、今後さらに少子高齢化の進む日本においては大学のあり方も問われております。応用化学科も例外ではなく、入学者の確保や多様なバックグラウンドを持つ学生の教育、卒業生の学力や技術力の保証など、その他、日々刻々と変化する様々な問題に対処する必要があります。これらの問題の解決に向けて教職員一丸となって努力しておりますが、本同窓会のサポートは不可欠な要素であり、是非ご支援のほど宜しくお願い申し上げます。



工化同窓会創立五十周年にあたり

東 保男 (昭和四十二年度卒)

創立三十周年を迎えたことを心よりお祝い申し上げます。私は工業化学科ならびに応用化学科の一員として(同窓会の一員でもあります)長年にわたり在職させていただきました。また在職中同窓会の皆様に無理難題なお願いを何回もいたし、皆様から何時も快くご支援・援助を賜りましたこと、決して忘れる事はありません。これが工化同窓会の皆様の繋がりであり、“人としての力”となっていると思います。

私は定年後、故郷の北海道で年金生活を過ごしております。田舎では暇があり、本を少しだけ読む機会が多くなりました。化学の分野以外にもすばらしい分野があることに気づかされました。例えば、紀元前五百年頃にはインドではブッダ・ゴータマ(仏教)、中国では老子などが、人としての生き方を既に説いていますし、日本でも古くから多くの思想・宗教家などが、人々に行き方(徳)を説き、且つ行動していた事も知りました。

今日の社会はグローバル化、情報化、差別化などが急激に進行し、複雑に絡み合った難問題を解決する事は容易ではありません。この閉塞した世の中に立ち向かうためには、例えば化学の基礎だけをしっかりと身に



つけ、それに基づいた“人としての思考力”が高める事ができれば、解決に向かって前進することができると思っています。そして、このような会員同士の繋がりや輪が広がって行けば大きな力になるものと思います。

私は感謝、尊敬、謙遜、満足と慈しみ感じながら、行く末を生きたいと念じております。工化同窓会の益々の発展をお祈り申し上げます。

工化会の現況 応用化学科 同窓会事務局長 浅香 隆 (昭和六十二年度卒)

2001年に工業化学科から応用化学科へと学科名称が変わり、学科定員も160名から80名となりました。応用化学科として2004年度以降、毎年八十余名の卒業生が進学ならびに社会へ巣立っております。吉田会長も述べられているとおり、平成二十七年度時点の卒業生数は約7500名に達しているものの、大学として連絡が取れる方は約4500名であり、約3000名の方々は音信不通の状態です。これは住所変更の連絡が為されていない・大学からの連絡に返事をしていないことが原因です。今回、総会の案内が届かない等の苦情を頂戴しましたが、このことは一方で同期や先輩・後輩のネットワーク経由で連絡が取れていることの証でもあります。これら小さなネットワークを束ねて学科の太いネットワークを構築することが吉田会長の構想であり、数年以内に代議員のメーリングリストの完成を期したいと願っております。



学科の現況 応用化学科 主任 秋山 泰伸

現在、応用化学科は9名の教員、約350名の学生、事務・技術職員の方々に構成されております。

化学は適用範囲が広く多種多様な分野で応用される技術・学問であります。その事を反映するように構成員のバックグラウンドも多種多様で、応用化学科の前身の工業化学科出身の先生もいれば、私のように他大学で学び教員を務めた後に本学にお世話になっている者、企業人から教員の道を選択された方もいる。学生も全国各地の付属高校、普通高校、総合技術系高校などから迎え入れております。さらに、昨今のグローバル化を反映し、中東やアジア各国から二桁に迫る留学生が毎年入学しております。また、多い年では3割以上の女子学生も入学しております。先に紹介しましたように教員の教育・研究分野も多岐にわたっており、実際に学生の就職先も工業化学系に限らず、電気系、機械系、情報系、公務員、理科教員など他分野にまたがっております。

一見、カオスに見える構成員や内容に感じられるかもしれませんが、これこそ“化学の本質”である多様性であり、視野を広げ、学問の垣根を越え、本学の理念である文理融合をなすとげるポテンシャルを持つ学科であると思っております。

大学の現況 応用化学科 同窓会事務局長 浅香 隆 (昭和六十二年度卒)

2017年に七十五周年を迎える当大学では、すでに18号館(理学部棟)が完成して化学実験室や応用化学科の学生実験室がA館から移動しました。その代わりにA館は解体され、その跡地に十階建ての19号館(工学部と情報理工学部棟)を建設中であり、時代の変遷を感じます。私たちが教を請うた多くの先生方がすでに鬼籍に入り、卒業生からも「知っている先生が居ないから足を運びにくい」という声が聞こえてきます。

超高齢社会への突入、十八歳人口の減少、高校生の大学進学率50%超を迎え、大学のみならず工学部の中でも「定員割れ」が散見されるようになりました。このような理由から、大学としてはカリキュラムの見直しと新たな編成を行っていますが、場合によっては学科再編という話も取り沙汰されています。工業化学科は応用化学科へと発展的に移行しましたが、有り難いことに卒業生の皆様がご子女を応用化学科へ入学させて下さることを通じて、皆様の母校愛を私共も感じることができます。卒業生の教員一同、工学部の中の化学という意味での「工化」が途絶えることの無いよう努力する所存です。

連絡事項：学科事務業務の統合が予定されています。そのため、工化同窓会事務局へのお問い合わせ・ご連絡は、暫定的に事務局長のメールアドレス (asaka@tokai-u.jp) へお願い致します。準備が整い次第、学科ホームページ (<http://www.ek.u-tokai.ac.jp>) に同窓会のページやメールアドレスを掲載致します。なお、同期会の開催などを企図して同期生や先生方の連絡先を事務局へ問い合わせられる方がいらっしゃいますが、個人情報保護の観点から回答しかねますことをご了承下さい。このような場合は、大学同窓会にご相談下さい。